

スポーツタレント発掘における心理学的研究

— ナショナル体操競技選手の性格からみた気質の側面 —

後藤清志
上地雄一朗

清水正典*
梶谷信之**

I. はじめに

スポーツ選手、特に一流競技選手の心理的特性は、これまで実施してきた、メンタルタフネス、エゴグラムにより、共通の構造があることが明かとなった。従って、トップレベルの競技選手育成に際しては、単に、身体的側面のみならず精神的側面においても特定のパターンを習得させることが必要であり、そのためのトレーニングメソッドが開発されることが重要である。

ところで、一連のチャンピオンに特有の心理構造がいかに形成されるかについては、その選手のおかれた、生活環境、練習環境、社会環境などとの相互作用や、遺伝的形質によるものなど様々な説があり、現在では、まだ明確な仮説は提示されていない。そこで本研究では心理構造の基底的部分を構成する、心理的気質に焦点を当て、トップ選手の気質に一定の形態が存在するか否かを明らかにして行くことを目的とする。すなわち、チャンピオン特有の心理構造を形成するためにはその根幹をなす心理的気質にも一定のパターンが存在すると仮定し、選手育成の早期の段階で心理的気質が明かとなれば、その選手の将来の心理構造についてのある程度の予測が可能となり、競技選手の心理的なタレント発掘の有効な手段となり得るからである。

今日、世界のスポーツ先進国では一流選手の早期発掘に力を注ぎ、その選手の持つ素質の判定には、様々な手法がとられている。現在主流となっているのはおもに、身体的タレントの判定であり、医学的見地からのアプローチが多い。たとえば中国では選手の3世代先にまでさかのぼって身体的特性を調べ、必要なタレントを保持していると判明してから育成を開始している。その他旧ソビエト、旧東ドイツでも様々な医学的手法を用いてスポーツタレントの発掘を行い、有能な選手を数多く輩出している。

しかしスポーツタレントの発掘に際して心理学的タレントにたいする注目度はまだ低く、何等かの心理的検査を行っている事例はまだ報告されていない。このことは、スポーツタレントに占

* 吉備国際大学

** 岡山大学

める心理学的認識がまだ低いことの現れであると同時に、スポーツタレントにおける心理的要因の特定とその検証が、まだ発展途上にあることを物語っている。しかし、近い将来、スポーツタレント発掘に際して心理学的手法が導入されることはほぼ確実であり、本研究はそのための基礎的研究の目的を持つものである。

II. 分析枠組み

われわれがこれまで行ってきた、一流選手に対する一連の心理学的研究はメンタルタフネスとエゴグラムである。前者は、一流選手の競技中の心理構造の実態を明らかにし、その結果一流選手には特有のパターンがあることが明かとなり、ジムレイアーの提示するチャンピオンスタイルに近いパターンが存在することが明かとなった。しかし、これは、あくまでも試合という選手生活の一部の現象であり、試合中の心理構造を規定する基礎的要因の解明が新たな課題として浮かび上がってきた。その結果、われわれが次に試行したのが選手の一般的人格構造であり、競技心理構造を規定するバックグラウンドとしての位置づけを与えて、東大式エゴグラムを用いて一流選手の実態を調べてみた。その結果、競技心理同様に一流選手には特定的人格パターンが見いだされ、一流選手には競技中のみならず不断の生活を規定する人格構造にも共通のパターンがあることが明かとなった。従って、チャンピオンスタイルの競技心理構造の形成のためには特定的人格構造の形成が必要であり、選手の生活全般に対する心理学的サポートが必要であることも判明した。しかし、ここで問題とされたのは一定的人格構造形成のメカニズムでありわれわれのグループでは、選手の人間関係によるもの、選手の社会生活によるもの、選手の心理的発達段階によるもの、選手の両親との相互作用の結果形成されるもの、遺伝的形質によるものなどの仮説が提出され、今後の研究でこれらを順次検証して行くことを決定した。

この中でまず手始めに選手の人格構造をさらに基盤から支えている要因が存在するのではないかという観点から、心理的気質に焦点が当てられ、今回研究が開始されることとなったのである。

心理的気質については古くはヒポクラテスが4気質説を提出し長く影響を及ぼし、比較的最近になってクレッチマーらの体型による気質分類が行われるなど、心理学の領域では古典的研究として位置づけられている。しかし、気質研究はクレッチマー以後、心理学的諸手法の発達の陰に隠れて、目だった研究は行われず、わが国では1940年代に下田光造による執着性格の提出により気質研究が始められたとされる。下田はクレッチマーの循環性格を批判し、当時わが国で主流であった、ドイツ精神医学に対抗して、学説を展開したが、当時は2、3の研究者をのぞいて受け入れられなかった。

その後、20年を経て1960年に入り、下田の学説を支持する論文が平沢一やテレンバッハにより発表され精神医学の一領域を形成することとなる。

下田学説の一つの特質は、執着性格とメランコリー親和型性格に焦点を当て、この二つの性格

とそう鬱病の関連を明らかにした点にある。この中でこれまで精神病の一つとみられてきた、そう鬱病が実は精神的に健康な人にもみられる上記二つの型の性格と密接な関係を持っており、決して特殊な気質による発現ではないこと、従って通常一般人にもみられる上記二つの性格について病気としての境界を設定することは適切ではないことなどを強調している。

執着性格は「熱中性、徹底性、強い義務責任感」を特徴とし、日本人には特に多くみられる気質の形態である。また、メランコリー親和性格は「一定の秩序にいつも従うこと、凡帳面さ、他者のための存在」などを特質としこれも日本人に多く認められ、テレンバッハによれば両者は密接な相互関係にあるということである。

下田は、この執着性格を中心として、精神的気質を次の6つの要因によりなると定義している。すなわち、同調性格(C)、自閉性格(S)、執着性格(I)、神経過敏性格(N)、自己不全性格(U)、自己顕示性格(H)であり、この項目に従って質問項目を設定し、テストとして完成されたものがSPI性格検査である。

この性格検査の本来の目的は、登校拒否など社会的不適応を起こす子供の性格診断にあり、特に鬱病との関連で、その予防の目的を持って実施されるものであり、本研究のように健常者の性格診断に使われることは希である。しかし、下田も主張しているように執着性格およびメランコリー親和型性格は日本人には一般的にみられる性格特質であり、まじめな人に多い性格特質とするならば、社会的に立派に貢献していく上で必要な性格であり、積極的な位置づけを与えられてしかるべきものである。

この観点から本研究では様々な気質特性はその用い方によってプラスにもマイナスにも作用するものであり、よりプラスに作用させるための手だてを考えていくことが建設的な研究方針であるとの立場をとり、これらの性格をある程度効果的に利用しているトップアスリートに焦点を当て、選手の気質の実態から探り、特に執着性格、メランコリー親和型性格がどのような形で発現しているかを明らかにしようとするものである。

Ⅲ. 方法

本研究では競技選手の気質構造を把握するため、気質テストを実施した。用いられたのは成人用SPI性格検査テストであり、1994年7月11日から8月31日にかけ1994年度第33回NHK杯ドルトムント世界選手権大会・広島アジア大会選手最終選考会出場者男子上位9名、女子上位19名及びその両親に対して郵送し実施した。この結果、得られたデータを項目毎に得点化し、性別比較、両親比較、親子比較を実施した。なお、回収率は100%であった。

IV. 結果

(1) 性別比較

全日本クラスの選手の気質の特徴は執着性格と自己顕示性格に高いスコアが認められ、自己不全性格や同調性格のスコアは低いことが明かとなった。このことは体操競技男子選手は物事にこだわり、他人に注目されたいという気質が強く自己に対する劣等感が低く、余り社交的でないという特質が浮かび上がってくる。

一方女子選手は自閉性格、執着性格、同調性格のスコアが高く物事にこだわり、気むづかしい反面社交的であるという気質の特質が浮かび上がってくる。男子選手との共通点は、執着性格のスコアが共に高いことであり、この点体操競技選手に必要な気質の要素ということが出来るが、男女で大きく違う点は自己顕示性格が男子では高いスコアを示すのに対して女子では低いスコアであるというまったく反対の傾向を持っていることである。

一般的に6つの気質的要因に対するスコアは同調性格をのぞいて女子より男子の方が高い。(図1)

図1 全日本体操競技トップアスリート
性別比較

スケール名	性格特性	段階SS	1		2		3			4			5									
			~34	35 ~	44	45 ~	54	55 ~	64	65 ~												
自閉性格	・感じやすい ・人つき合いがよくない ・気むづかしい	S	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	20						
神経過敏性格	・神経過敏 ・身体の調子がくるとい易い ・異常に深寝	N	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	20						
自己不全性格	・自信がない ・劣等感 ・いつも自分のことを気にする	U	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
執着性格	・きちょうめん ・仕事熱心 ・こり性	I	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
同調性格	・ほがらか ・あっさりしている ・社交的 ・楽天的	C	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
自己顕示性格	・気分がかわり易い ・滅多このみ ・大げさ	H	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20

※ $P < 0.05$

—— 男子選手 女子選手

(2) 男子選手、女子選手別にみる父親の気質的特質

次に男子選手、女子選手のそれぞれの父親についての気質を分析すると、まず男子選手の父親は執着性格のスコアが最も高く、つづいて同調性格、神経過敏性格、自閉性格となり、自己不全性格、自己顕示性格のスコアが著しく低くなっている。

これに対して女子選手の父親は、執着性格と同調性格のスコアが同じであり、神経過敏性格、

自己不全性格、自己顕示性格のスコアが低い。

男子選手、女子選手の父親とも神経過敏性格を除いて、ほぼ同じパターンを示しており、女子選手より、男子選手の父親の方が神経過敏性格のスコアが高いという違いがでてきている。(図2)

図2 全日本体操競技トップアスリート
父親/男女選手別比較

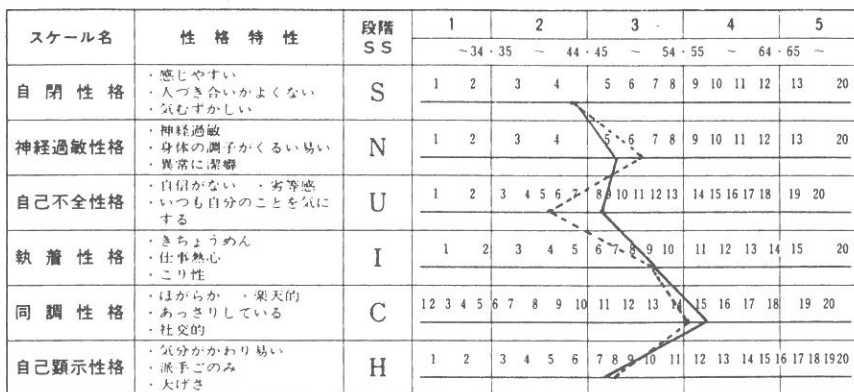


—— 男子選手 女子選手

(3) 男子選手、女子選手別にみる母親の気質的特質

男子選手の母親は同調性格に突出したスコアを示し、自閉性格、自己顕示性格、神経過敏性格、自己不全性格のスコアは低くなっている。男子選手の母親は社交的な気質の持ち主といえることができるが、これに対して女子選手の母親は、神経過敏性格では男子選手の母親よりスコアが高く、自己不全性格では男子選手の母親よりスコアが低い傾向が出ており、そのほかは男子選手の母親と同じスコアのパターン、ほぼ同じ水準のスコアを示している。女子選手の母親は、社交的である反面、物事にこだわり、神経が細やかであるという特質が示されている。(図3)

図3 全日本体操競技トップアスリート
母親/男女選手別比較



—— 男子選手 女子選手

(4) 男子選手とその母親の気質の比較

男子選手とその母親の気質を比較してみると、男子選手の母親は神経過敏性格、執着性格、自己顕示性格が強く、自己不全性格、自閉性格、同調性格が弱い傾向にあり、潔癖で物事にこだわり安く、目だちたがり屋であるという気質的特質が浮かび上がってくるが、男子選手の気質的特質と比較してみると、執着性格と自己顕示性格のスコアが高く、同調性格と自己不全性格のスコアが低いという点ではよく似ており、このあたりは母親の気質的影響をかなり強く受けていると予想される部分であるが、異なる点は自閉性格のスコアが母親が低いのにに対して、息子がかなり高い傾向がでてきており、特徴的である。

一般的にみて、母親のスコアよりも男子選手のスコアの方が高くなっている。(図4)

図4 全日本体操競技トップアスリート
男子選手・母親比較

スケール名	性格特性	段階 SS	1 2 3 4 5																																							
			~34・35				~44・45				~54・55				~64・65				~																							
自閉性格	・感じやすい ・人付き合いがよくない ・気むすかしい	S	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	20												
神経過敏性格	・神経過敏 ・身体の調子がくるとい易い ・異常に潔癖	N	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	20												
自己不全性格	・自信がない ・劣等感 ・いつも自分のことを気にする	U	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
執着性格	・きちょうめん ・仕事熱心 ・こり性	I	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	20								
同調性格	・ほがらか ・楽天的 ・あっさりしている ・社交的	C	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
自己顕示性格	・気分がかわり易い ・敵手ごのみ ・大げさ	H	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20

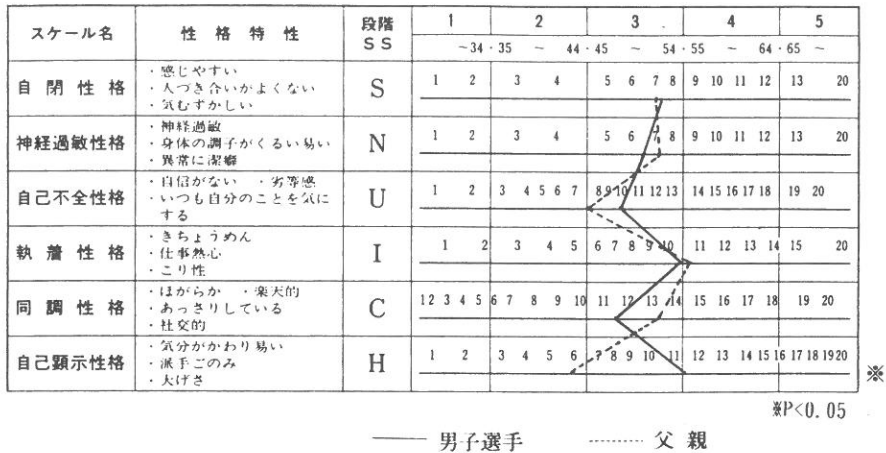
—— 男子選手 母親

(5) 男子選手とその父親の気質の比較

男子選手の父親は執着性格のスコアが最も高く物事にこだわる傾向が強く、自閉性格、神経過敏性格、同調性格のスコアも高い。マイペースで神経過敏である反面、人付き合いも良いという一見矛盾した性格である。また、自己不全性格や自己顕示性格のスコアが低く劣等感もない代わりに自己主張もしないという落ち着いた気質特性を現している。

男子選手と比較してみると、自己顕示性格以外はほぼ似たレベルのスコアを示しており、気質的にはかなり類似点があるものと考えられる。(図5)

図5 全日本体操競技トップアスリート
男子選手・父親比較



(6) 女子選手とその母親の気質の比較

女子選手の母親は、同調性格、神経過敏性格、執着性格のスコアが高く、自閉性格、自己不全性格のスコアが低くなっており潔癖で物事にこだわりやすい反面、対人関係ではあっさりしており社交的であるという気質の特徴が浮かび上がってくる。これに対して女子選手は、自閉性格と自己不全性格で母親をかなり上回るスコアを示し、母親よりも劣等感が強く感じ安い気質となっている。この点は女子選手の年齢的特質もあり、多くの選手がジュニアという思春期に差し掛かっていることの現れとも理解することができる。また同調性格は母親よりもかなり低いスコアとなっており、社交性は母親よりも低い状態にある。このことは母親は選手よりも人生経験が長く社会的経験も豊富なため同調性格のスコアが高くなると考えられ、選手は母親と比べると社会的経験が浅い分、同調性格のスコアが低いと捉えることができる。

女子選手とその母親の気質的特質はかなり大きな違いが認められ、全体的なパターンがかなり違う点が特徴的である。このことは、女子選手と母親の関係が必ずしも協力、強調関係にあると言うよりは、むしろ競争的関係にあると考えることもでき、娘と母親という人間関係のあり方を反映しているとも考えることができる。(図6)

図6 全日本体操競技トップアスリート
女子選手・母親比較

スケール名	性格特性	段階 SS	1		2		3		4		5											
			~34	35 ~	44	45 ~	54	55 ~	64	65 ~												
自閉性格	・感じやすい ・人付き合いがよくない ・気むすかしい	S	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	20						
神経過敏性格	・神経過敏 ・身体の調子がくらくらい易い ・異常に敏感	N	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	20						
自己不全性格	・自信がない ・劣等感 ・いつも自分のことを気にする	U	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
執着性格	・きょうめん ・仕事熱心 ・こり性	I	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	20				
同調性格	・ほがらか ・楽天的 ・あっさりしている ・社交的	C	12	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
自己顕示性格	・気分がかわり易い ・選手ごのみ ・大げさ	H	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20

※

*P<0.05

—— 女子選手 母親

(7) 女子選手とその父親の気質の比較

女子選手の父親は執着性格、同調性格のスコアが高く、神経過敏性格、自己不全性格、自己顕示性格のスコアが低くなっており物事にこだわる反面社交的であり、穏やかな気質的特質を持っていると考えられる。6要因のスコアパターンは女子選手とその父親とも類似のパターンをとっているが、女子選手よりも父親の方がスコアのばらつきは大きくなっている。神経過敏性格、自己不全性格、自己顕示性格は女子選手の方がスコアが高く、執着性格、同調性格は父親の方がスコアがかなり高くなっている。

母親と比較すると父親との類似点の方が多く、気質的には女子選手は母親より父親の影響を強く受けている感が強い。この当りは、幼少期の両親との人間関係のあり方にも何等かの原因があると考えられ、エリクソンらの提示するエディプスコンプレックスなども関与していると考えられる。(図7)

図7 全日本体操競技トップアスリート
女子選手・父親比較



※P<0.05

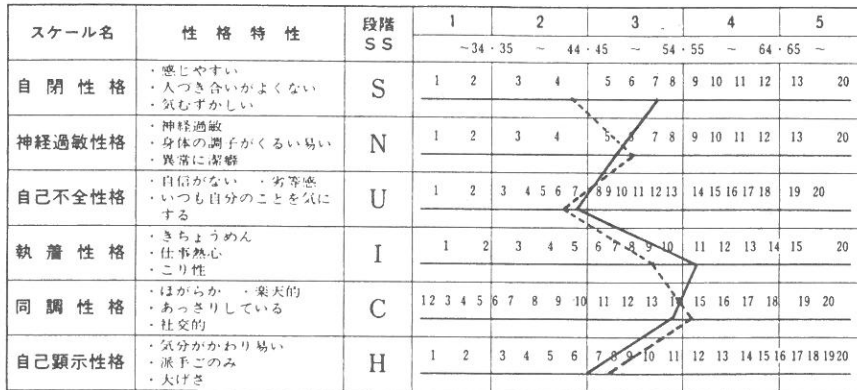
—— 女子選手 父親

(8) 男女選手全般でみた父親と母親の気質的特質

一般的に父親は自閉性格、執着性格、同調性格のスコアが高く、自己不全性格、自己顕示性格のスコアは低くなっている。一方母親は全体的に父親とほぼ同じパターンを示し、自閉性格のみ父親よりもかなり低いスコアとなっている。

このことから、体操競技選手の父親と母親はかなり類似した気質構造を持っているが、男女の各選手に発現している気質構造とはかなり異なったものとなっており、選手の気質構造の形成には、両親と選手の間関係のみならず、選手とコーチや選手同士などの社会的な人間関係が及ぼす影響がかなりあると考えられる。(図8)

図8 全日本体操競技トップアスリート
父親・母親比較



—— 父親 母親

V. 考察

(1) 体操競技選手に共通する執着性格

今回対象とした男女選手及びその両親ともに共通して現れた気質的特質は執着性格であった。体操競技を志す上で、物事にこだわるという執着性格は競技力向上の上でも必要な気質的要因とすることができる。そして、この気質は両親との人間関係の中で受け継がれてくる内容のものであることが今回の結果から明かとなっている。

体操競技はその運動特性上、定められた環境の中で最高度に洗練された技術体系を基礎に構成されるため、技術の習得には膨大な量の反復練習が要求されること、完成度を追求するため、繊細な観察力、表現力が要求されることなどから、この執着性格は必要不可欠の気質的要因とすることができる。従って、体操競技選手のタレント発掘に際しての心理学的ポイントの一つはこの執着性格を持っているかどうかを判定することであり、この気質を持っていない選手は将来、トッププレイヤーに育つ可能性は低いと考えられる。

(2) 自己顕示性格の強い男子選手

また、男子選手の特質は執着性格と共に自己顕示性格のスコアが高く、派手好き、人よりも目立ちたいという気質が必要であることを示している。しかしこの気質を両親でみると父親、母親ともその傾向はなく、この気質が青年期特有のものであることがわかる。従って青年期になってこの気質が発言するかどうかの一つのポイントであるが、これは両親との関係というよりは、友達関係や、コーチとの人間関係の中で形成されるものと考えられ、周囲に自己顕示性格の強い人間がいるかどうかは鍵になる。しかし、あえて両親との関係で論ずるならば、父親よりむしろ母親の影響を受けていると仮定でき、母親が派手好きな気質を持っていることが、そのベースとなると考えることもできる。

(3) 母親の影響を強く受ける男子選手の気質

結果より明らかなことは男子選手は、父親より母親の気質的影響を強く受けていることであり、この点は後述するが女子選手とは逆の結果となっている。人格理論的に考えるならば、エリクソンらの提唱するエディプスコンプレックスによれば、母親より父親の影響を強く受けるはずであるが、それが逆であるということは、現代の家族形態のあり方にも問題があると考えられる。すなわち、育児の主権がほぼ女性にあり、幼児期の人格形成には父親よりも母親の影響を圧倒的に強く受けることから気質的にも母親のものを受け継ぐようになると考えられ、特に近年男子にその傾向が顕著に現れている。このことは、両親、特に母親が自分と息子を同一視し、自分の自己

実現を息子の人生において達成しようという傾向も影響を与えているのではなかろうか。

ただ全体的に男子選手は、父親の気質パターンもかなり継承している部分があり、その意味で、父親、母親とも、良好な人間関係を形成してきたともいえる。従って、体操競技選手にふさわしい気質の習得のためには、気質習得の基盤となる両親との良好な人間関係も条件の一つに加えなければならない。

(4) 父親の影響を受ける自閉性格

男女の選手に共通して見える気質に、スコアはそれほど高くないが、自閉性格がある。これを男女別に、両親との比較で分析してみると、男女とも選手と父親とのスコアが非常に似通った結果が明かとなっている。母親は男女とも、かなり低いスコアにとどまっており、自閉性格の形成は父親の影響によるところが大きい。

なぜ自閉的な性格のみを男女が共通して父親から受け継ぐのかは現時点では明かにできないが、この傾向は、きわめて特徴的なものであり、今後さらに詳細な分析を行うことが必要である。

(5) 父親の影響を強く受ける女子選手の気質

男子選手が母親からの影響を強く受けているのに対して、女子選手は、父親から気質的影響を強く受け、母親とはむしろ対立関係にあることを示唆するような結果が現れている。このことは、現代の家族の人間関係が、男子は、母親に、女子は父親にという構図になっていることの反映と捉えられ、女子選手の気質形成には父親の影響が強く作用することを予想しなければならない。女子選手のスコアの特徴は6要因全てにわたり平均的に得点をマークしていることにあるが、自閉性格、自己不全性格などは青年期特有の気質構造と考えられ、年齢を重ねるに従いスコアが低下して行くものであるがトップアスリートとして活躍するためには女子選手にはある程度必要な気質的要因として考えるべきであろう。

いずれにしても女子選手の気質的特質は6要因のバランスのとれた形成にあり、両親との人間関係と共に、様々な社会的関係の中で形成されるものとして捉える必要がある。

(6) トップアスリートにも顕著にみられた執着性格

今回の調査の結果、体操競技選手のトップアスリートに明らかに認められた気質的特性として執着性格があげられるが、下田らの研究によれば、日本人に最も多くみられる気質特性であり、特に鬱病の病前性格として重要な因子であることが指摘されてきた。しかし、本研究の結果からするならば、全日本レベルの高度な目標を達成していく上で必須の気質特性であることが明らかであり、執着性格は非常にポジティブな側面も合わせ持った気質特性であると結論できる。

このことから、様々な気質特性はその用い方により建設的になったり、破壊的になったりするということであり、個人の気質にあった指導法の確立が必要である。執着性格が鬱病に結び付く

背景について下田らは明確な理論を提出してはいないが、その個人の持つ対人関係、個人の所属する集団、組織などの社会的関係との相互作用の中で形成されるものと考えられる。従って、個人を取り巻く社会環境のより建設的な整備が、建設的指向をもった人間の形成に重要な鍵を握っていることを認識すべきである。

(7) 親から子に気質的要因は継承されるか

今回の結果から、ナショナル体操競技選手の気質的特質として明らかになったことは、男女ともに共通してみられたのは、執着性格のみであり、このほかに男子では自己顕示性格が必要であるということであった。そして、親から子に対する気質の形質の継承については執着性格は両親から、男子の自己顕示性格は母親から、男女の自閉性格は父親から継承されるということである。このほか全体的にみて男子選手は母親の気質的影響を強く受け、女子選手は父親の気質的影響を強く受けるということであり、選手の両親の影響はそれぞれにパターンを持って現れていることが明かとなった。しかし、選手の気質形成を選手の両親だけから説明することには無理があり、両親との人間関係のほかに、選手本人の心理的発育段階や選手のもつ対人関係などによっても大きく影響を受けていることが予想される。つまり、心理的気質の形成には社会的要素が多分に含まれ、その意味で選手の社会環境、特に対人関係の整備充実が大きな鍵を握っていると感じさせる結果であった。

今後の課題としては、この方法でほかの種目についても実証研究を続けて行くと同時に、選手の社会環境要因をさらに理論的に精密化し、操作概念を導きだして、気質形成に果たす英強度の測定なども実施して行きたいと考えている。

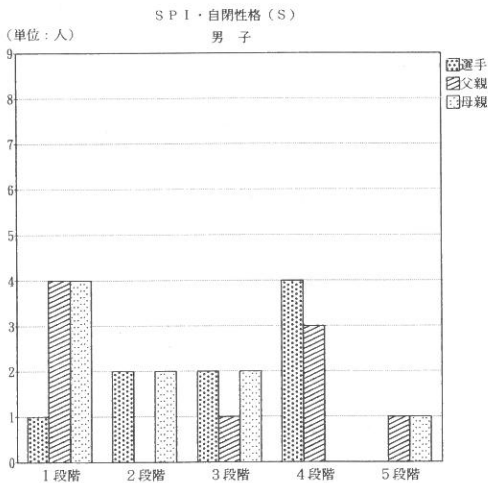


図 9-1

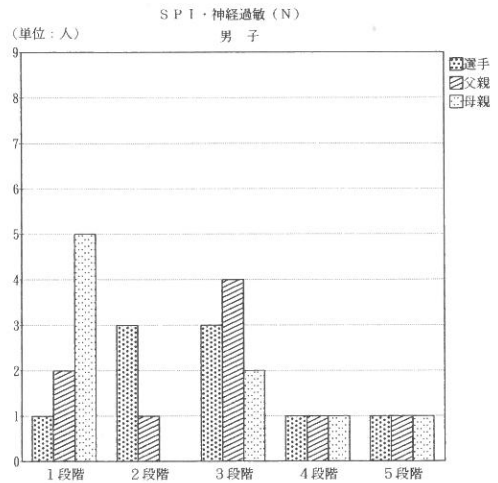


図 9-2

スポーツタレント発掘における心理学的研究

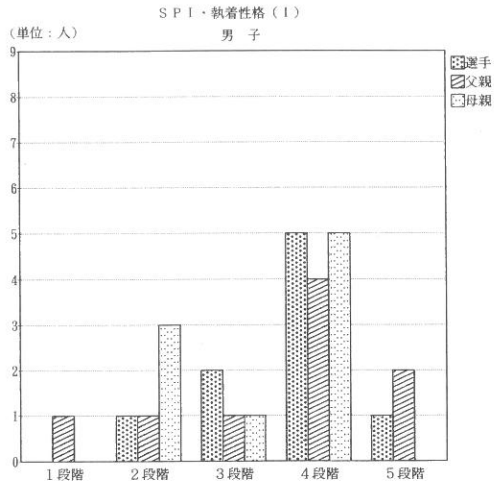


図 9 - 3

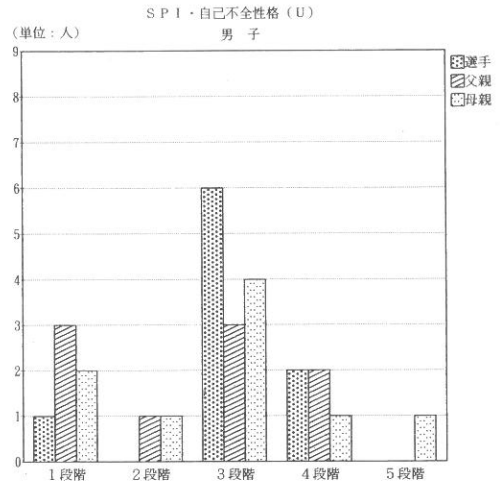


図 9 - 4

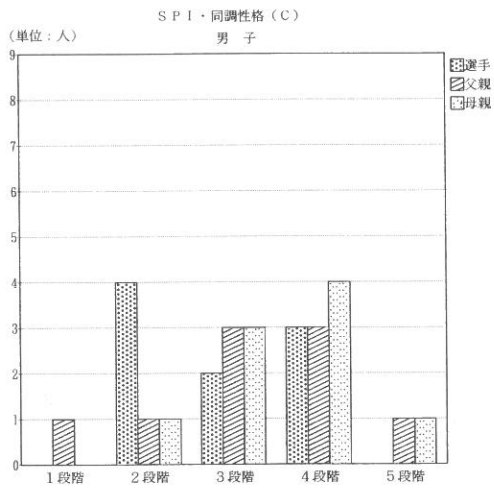


図 9 - 5

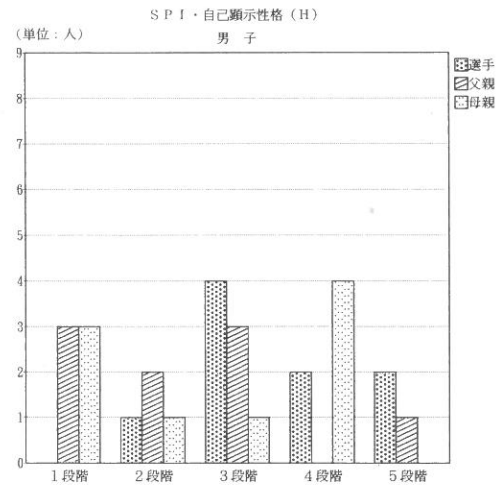


図 9 - 6

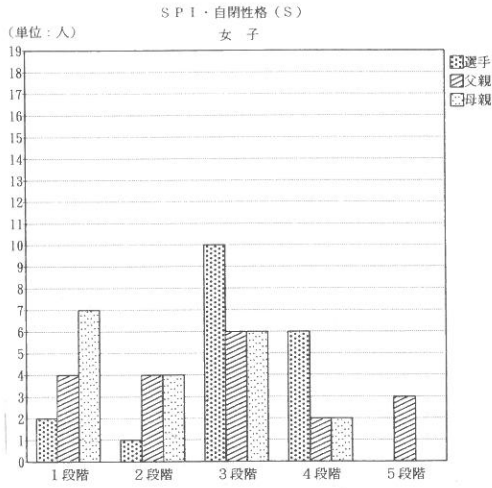


図10-1

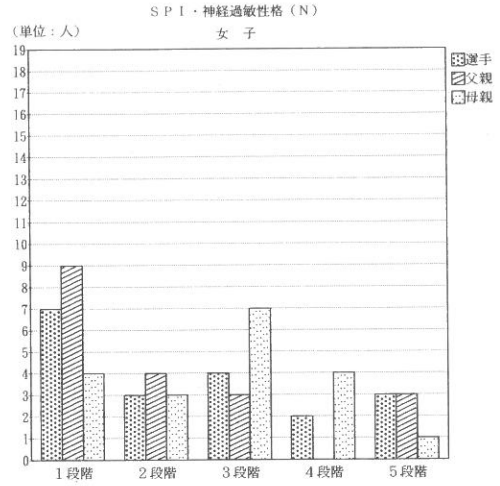


図10-2

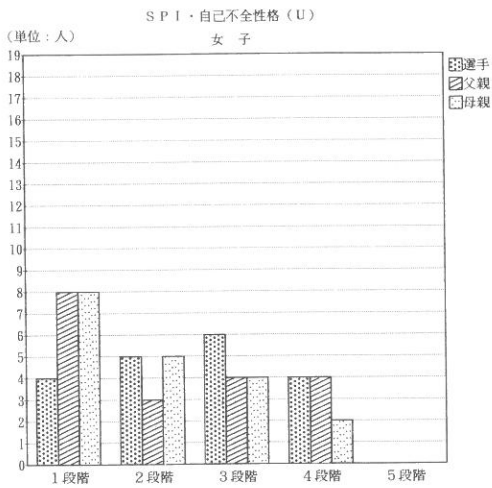


図10-3

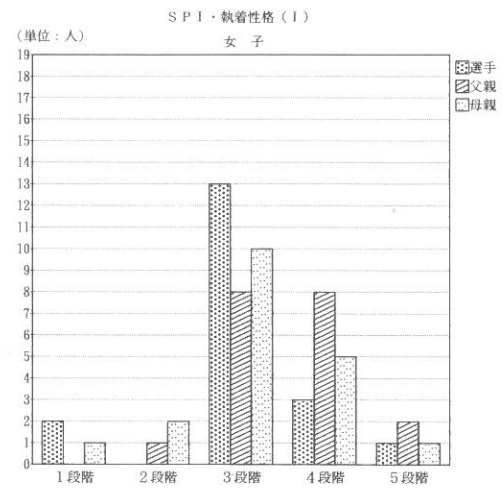


図10-4

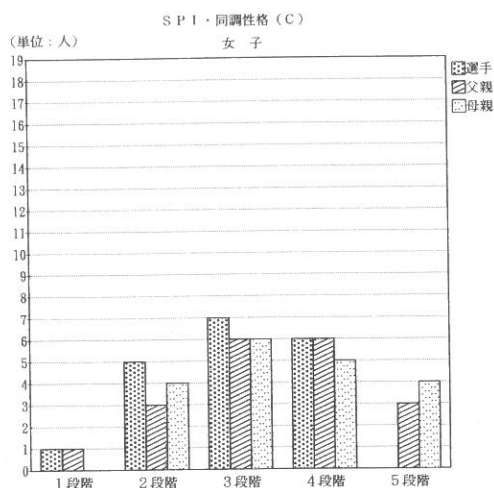


図10-5

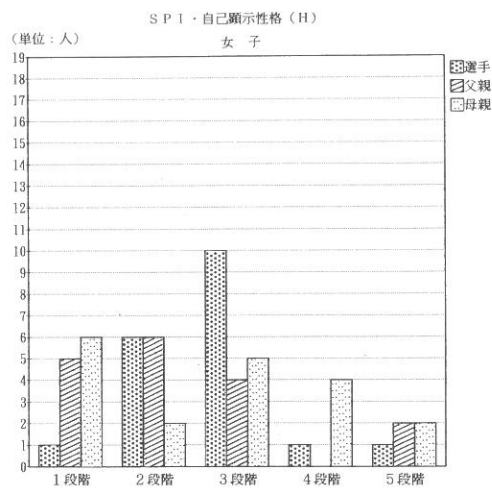


図10-6

引用・参考文献

- 1) Allpor, G. W., (豊沢 登訳) : 人間形成—人格心理学のための基礎的考察—, 理想社, 1959.
- 2) Allpor, G. W., (今田恵監訳) : 人格心理学 上・下, 誠心書房, 1972.
- 3) 岡沢祥訓 : 卓球選手の心理的適性に関する研究, 中京女子大学紀要第19号73-77, 1985.
- 4) 角川雅樹, 高宮 靖 : 体育学部学生の性格特性に関する調査研究, 東海大学紀要体育学部第17号27-36, 1987.
- 5) 小林 登 監修 : 別冊発達—乳幼児の発達と母と子の絆—, ミネルヴァ書房, 1987.
- 6) 後藤清志, 清水正典, 梶谷信之 : スポーツ選手の人格構造Ⅰ, 岡山県立短期大学紀要第34巻, 1991.
- 7) 後藤清志, 清水正典, 梶谷信之 : スポーツ選手の人格構造Ⅱ, 岡山県立短期大学紀要第35巻, 1991.
- 8) 後藤清志, 清水正典, 梶谷信之 : スポーツ選手の人格構造Ⅲ, 岡山県立短期大学紀要第36巻, 1991.
- 9) 佐藤俊昭 : 子どもの気質の追跡研究—序報—, 東北大学教養部紀要第43号, 1985.
- 10) 鈴木昭寿, 小村渡岐磨 : 体操競技選手の性格特性の一考察, 東海大学紀要第11号19-28, 1981.
- 11) ステラ・チェス, アレクサンダー・トマス, (林 雅次監訳) : 子供の気質と心理的発達, 星和書店, 1981.
- 12) 花田敬一 : スポーツマン性格, 不昧堂出版, 1968.
- 13) 半田智久 : パースナリティ, 新曜社, 1994.
- 14) 藤原喜悦 : 発達・性格心理学, 交成出版社, 1987.
- 15) 藤原健固 : スポーツマンと性格, 講談社, 1983.
- 16) 古田倭文男, 佐藤俊昭 : 気質の概念をめぐる諸問題, 宮城学院女子大学研究論文集63号, 57-75, 1985.
- 17) 星野 命, 青木孝悦, 宮本美沙子, 青木邦子, 野村 昭 : オルポートパーソナリティーの心理学, 有斐閣, 1982.

- 18) 前田喜平, 三宅和夫: 別冊発達8—発達検査と発達援助—. ミネルヴァ書房, 1988.
- 19) 松田岩男, 猪俣公宏, 落合 優, 加賀秀夫, 下山剛, 杉原 隆, 藤田 厚, 伊藤静夫: スポーツ選手の心理的適正に関する研究. 昭和55年度日本体育協会スポーツ科学研究報告第1報, 第2報, 1980.

(平成6年11月30日受理)